映画はボーダレス

世界の現実をウィットに満ちて描くと

中野 理恵

©2019 RECTANGLE PRODUCTIONS – PALLAS FILM – POSSIBLES MEDIA II – ZEYNO FILM – ZDF – TURKISH RADIO TELEVISION CORPORATION

見た後、座ったままで余韻に浸っていたかった。

目を真ん丸にあけて、じっとこちらを見る中年男性。本作のエリア・スレイマン監督だ。キリストが、幼年期から30歳ごろまで暮らした、と言われているイスラエルのナザレに生まれたパレスチナ人、という日本人には理解し難い立場のスレイマン監督。彼が自身を演じて、パレスチナからパリ、ニューヨークへと新作映画売込みの旅をするのだが、スレイマン自身のセリフは、僅かしかない。

スレイマンが自宅のテラスから下を見ると、レモンを木からもぎ取っている男が見上げて「泥棒と思うな、ドアをノックしたが誰も出てこなかった」と言うではないか。街に出ると物騒な男たちの集団が通り過ぎ、サイレンが響く。レストランでは横柄な2人の男がウェイターに「妹が料理の酸味が強すぎると言っている」とクレームをつけている。アラブの遊牧民や水を運ぶベドウィンの女性も現れたりする。別の日には、鷲から救ったヘビに恩返しをされた話をする老人と出会う。かと思うと、雨の夜に「小便が止まらない」と言う、ずぶ濡れの別の老人と相合傘をすることに。などなど、奇妙でマカ不思議な出来事続きの日々。

そんな日々に別れを告げて、いよいよ、新作映画の企画を売込むために、故郷のナザレを出て、パリからニューヨークへの旅に出る。行く先々の街で出会うのは、アイロニーに満ちた現実であった。パリの通りは美しい景観なのに、炊き出しに並ぶ貧しい人々、救護されるホームレス、街を走る戦車、旅行鞄を持った日本人カップルからは、「ブリジットを探している」と声をかけられる。華やかなイメージとは裏腹に、貧困にあえぐ人々も多く、また世界第5位の軍事力を有するフランスの一面ではないか。一方、やっと面会叶ったプロデューサーに、新作映画のテーマが〈中東の平和〉と伝えると、「笑っちゃう」とあっけなく断られてしまった。

ニューヨークに移ると、コートの肩に銃を抱えて出勤するOL風の女性がスクリーンに現れる。次々と銃を携えた人々が彼の前を行き交うのだ。空を見るとヘリコプターが旋回している。ブラックな発想だが、多民族が暮らし、世界に冠たる犯罪多発都市ニューヨークの厳しい現実を、見事にカリカチュアライズしていて、飽きさせない。それどころか、ドキッとしながらも、笑ってしまう。映画大学の講演会では対談相手から「あなたは真の流浪人ですか」といきなり問われ、セントラルパークでは、裸の天使と警官たちの〈追っかけっこ〉に出くわす。

ストーリーらしい流れはなく、スレイマンは対象をじっと見つめているだけなのだが、世界の現実を見事に切り取って描き、飽きることなく画面に惹きつけられる作品だった。ちなみに僅かな彼のセリフは見てのお楽しみ、と思うので書かないが、そこに込められているのは強烈なメッセージだった。

《Cinema Information》

『天国にちがいない』

フランス・カタール・ドイツ・カナダ・トルコ・パレスチナ映画(102分)／監督：エリア・スレイマン／公開中

なかのりえ：映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。『ハーヴェイ・ミルク』を第1回配給作品として、これまでに100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館, 2018)等。